キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン

ミコタマ

mico tama

帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2022　第3号

TAKE FREE

光が紡ぐ想いを夜空に映して

好きを形にする仕事
輝き続ける星の空間
夜空の画家
多摩地域の「顔」をのぞく
夜景が語るニュータウンの営み
深夜の多摩散歩

表紙写真

時刻は明け方、5 時 31 分。いつも賑わっている多摩センター駅周辺の人々や商店が起き始める少し前のこと、そこにはとっても静かな多摩の姿がありました。(2021 年 11 月 15 日)

本誌の編集について

本誌『ミコタマ』は、帝京大学総合博物館（帝京大学八王子キャンパス内）で展開中の「多摩のヨコガオ発見プロジェクト」の一環として作成しています。プロジェクトについては裏表紙をご覧ください。
本誌の企画・取材・文章執筆・デザインは、帝京大学総合博物館の指導のもと、すべて帝京大学に在籍する学生が中心に行っています。

Contents

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン

ミコタマ mico tama

帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト フリーマガジン 2022 第3号

「ミコタマ」の名前の由来

ミコタマとは、ラテン語の「輝く」という意味のミコ（Mico）と多摩地域のタマ (Tama) を合わせた言葉です。キラリと輝く多摩の魅力を本紙を通じて記録し、発信したいとの思いを込めました。

帝京大学総合博物館について

本館は 2015 年 9 月に帝京大学八王子キャンパス内に開館した博物館です。
帝京大学の持つ貴重な学術資料や最新の研究成果を、展示や講座などを通じて社会に広く公開しています。どなたでも入館できます。ぜひお越しください。

- Web サイト：https://www.teikyo-u.ac.jp/campus/hachioji_campus/museum
- Twitter（@Teikyo_Museum）：https://twitter.com/Teikyo_Museum
- Instagram（@teikyo_museum）：https://instagram.com/teikyo_museum/
- YouTube：https://youtube.com/channel/ UCFAxF_ST2oZoyFkrc3SfU-Q

浅川サイクリングロードから見た夕焼け。見晴らしが良く、天気が良いと富士山も見える（2021 年 12 月 1 日）

特集

光が紡ぐ想いを夜空に映して

08 好きを形にする仕事
～星空で感動を。そして興味を。～

11 訪れる人々を大切に 地域を大切に
輝き続ける星の空間
～府中市郷土の森博物館 プラネタリウム～

15 夜空の画家
多摩センターを彩るイルミネーション

19 多摩地域の「顔」をのぞく
～移り変わる街の表情～

22 夜景が語るニュータウンの営み
―京王堀之内駅周辺―

24 深夜の多摩散歩
あなたの知らない
多摩センターの新たな魅力

34 秋を感じる

38 天然理心流と井上源三郎

41 温泉を掘りあてた家

★ミコタマ通信

45 キャンパス自然観察だより

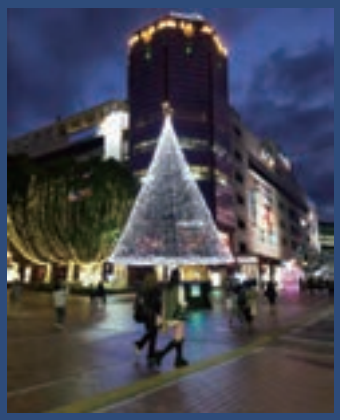
46 ミコタマ編集部ニュース

47 編集後記

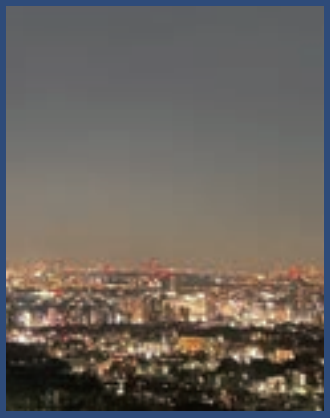
今号の取材場所

府中市郷土の森博物館
府中市南町６丁目３２

五藤光学研究所
府中市矢崎町４丁目１６

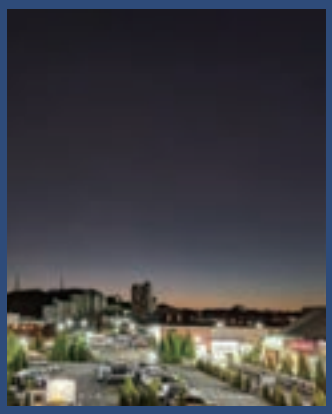


多摩センター
イルミネーション
多摩市落合１丁目



帝京大学八王子
キャンパスからの夜景
八王子市大塚３５９

深夜の多摩センター駅周辺
多摩市落合１丁目



京王堀之内駅周辺の夜景
八王子市堀之内３丁目

今号の取材マップ

塩釜温泉　観音の湯
温泉スタンド
八王子市大塚３８３

井上源三郎資料館・
天然理心流井上源三郎道場
日野市日野本町４丁目１１－１２

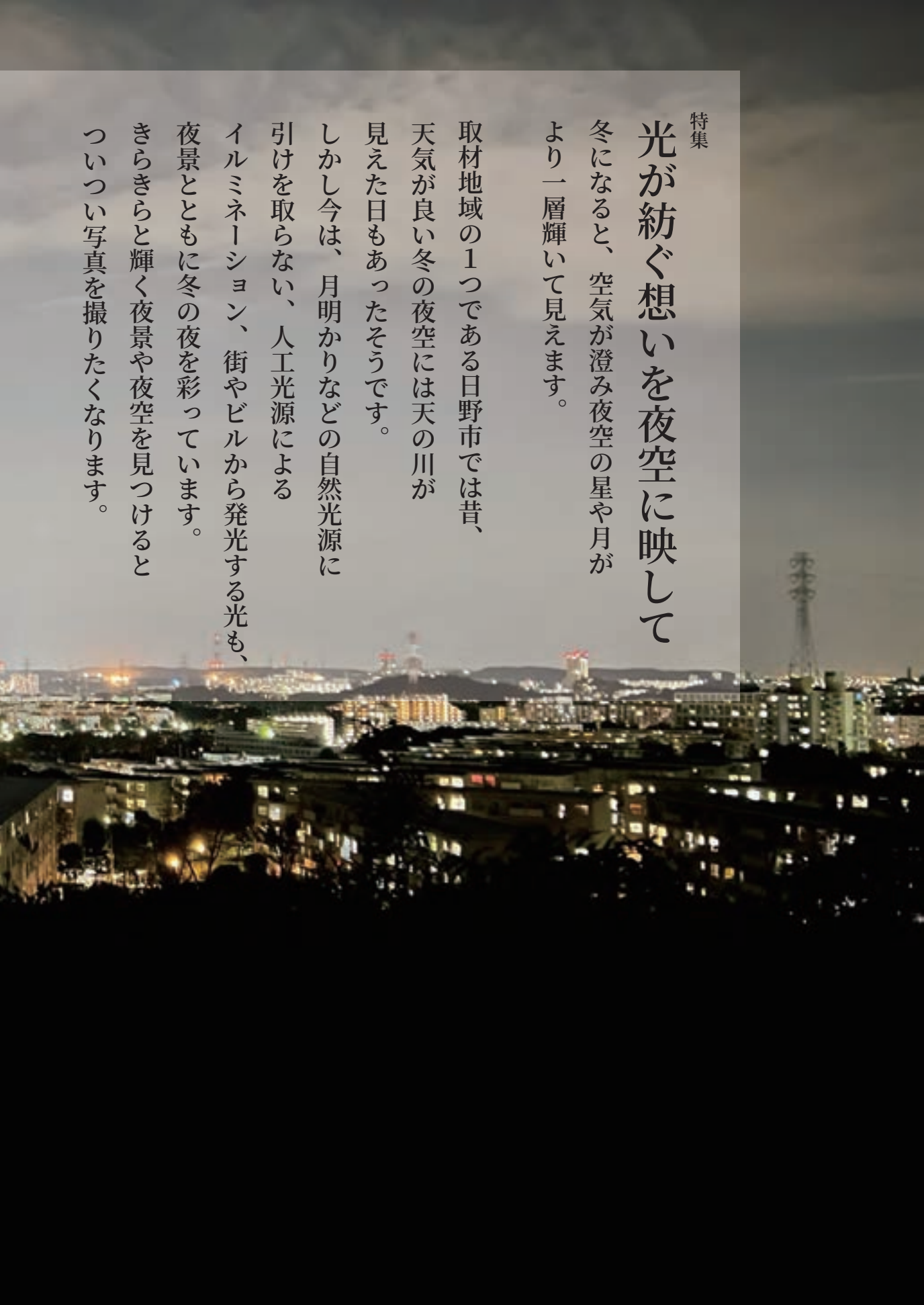
秋の帝京大学
八王子キャンパス
八王子市大塚３５９

特集

光が紡ぐ想いを夜空に映して

冬になると、空気が澄み夜空の星や月が
より一層輝いて見えます。

取材地域の1つである日野市では昔、
天気が良い冬の夜空には天の川が
見えた日もあったそうです。
しかし今は、月明かりなどの自然光源に
引けを取らない、人工光源による
イルミネーション、街やビルから発光する光も、
夜景とともに冬の夜を彩っています。
きらきらと輝く夜景や夜空を見つけると
ついつい写真を撮りたくなります。



目に映る光を記録に収めようと、
スマートフォンのカメラを光に向けても
肉眼で見る輝きよりも色褪せてみえます。

いま目に映る光はこの瞬間しか見られない。
そう思うと、もっと近づいてみたくなりました。

光を通して出会うことでみえる世界。
多摩の新しい一面を知りたい。
そんな期待も込めて多摩市と
その周辺地域を、
さっそく歩いてみることにしました。

「防人見返りの峠」(別名「多摩丘陵パノラマの丘」) からの夜景 (2021 年 11 月 6 日)

好きを形にする仕事

～星空で感動を。そして興味を。～

▲五藤光学研究所　外観

「株式会社五藤光学研究所」は、1926年、天体望遠鏡の製造・販売を主業務として創業した。創業当初は全国の学校、科学館などに大型の反射望遠鏡・太陽望遠鏡などを納入し、その後プラネタリウムの国産化に成功。小型から超大型のプラネタリウムに至るまで多機種を開発し、現在では1000台を超える納入実績がある。また、プラネタリウム空間における機器の開発・製造・納品だけでなく、その後の維持管理や番組コンテンツ[※1]の制作、施設運営まで、多くの技術者、専門分野の力を結集したプラネタリウムの総合プロデュースにも取り組んでいる。

＊＊＊

今見えている星空はいつか見えなくなってしまうかもしれない。そんな星空を見せてくれるのはプラネタリウムだ。私が幼かった頃、両親に連れて行ってもらったプラネタリウムを見て感動したことを今でも覚えている。今回の特集テーマが「夜景と夜空」に決まったとき、私に感動を与えてくれたプラネタリウムの投映機はどのようになっているのかということに興味を持った。そこで、投映機を製造している「株式会社五藤光学研究所」の明井英太郎さん・今井文子さんにお話をお聞かせ頂いた。

なぜここに？

星と府中にはどのような関係性があるのだろう。五藤光学研究所は1926年、東京都世田谷区三軒茶屋にて創業し、その後世田谷区弦巻に移転、1963年に現在の府中市矢崎町に移転した。府中が選ばれたのは、レンズの研磨などに用いる水が豊富に得られることに加えて、創業者の五藤齋三さんが現在地から見える富士山がとても綺麗で好きだったことが理由だった。五藤光学研究所の社章にも凹レンズと凸レンズに富士山があしらわれている。投映機の製造に必要な環境だけでなく、創業者が府中から見える富士山を好んだことによって現在地に移転してきたと聞いたとき、私は投映機の製造

▲凹レンズと凸レンズに富士山があしらわれ、「TOKYO」の文字が入っている

※1　番組コンテンツ：プラネタリウム番組の制作

に適した、府中と星の関係は運命的だったのではないかと感じた。

どうやって映しているの？

プラネタリウムで星空を見ると「本物の星空だ！」と思うだろう。そんな本物と瓜二つの星空はどのように作られているのだろうか。本物のような星空を映し出しているのは球体の投映機である。球体の中には実際に観測された星のデータをもとに作られた小さな穴の開いた原板が入っている。その原板の穴の大きさに意味がある。私たちが実際に星空を見たとき、星一つひとつの大きさや光の強さは違って見える。それを表現するために、原板の穴の大きさを大きくしたり小さくしたりする。それによって見え方に違いができ、本物のような星空が表現される。その原板を正多面体（サッカーボールのような形）に貼り付け、内側から光を照らし、球体自体が回ることで地球全体の星空を投映している。

最新の機械では、投映することのできる星の数や明るさを自在に調整することが可能である。そうすることで、都心での見え方、田舎での見え方、過去・現在・未来まで、あらゆる見え方を表現することができる。投映機の球体部分が回転することで、世界各地の星空を投映することができる。

東京都荒川区旧教育センターで 1946 年～ 2013 年まで 67 年もの間、現役で投映し続けた S-3 型

1988 年に開発された五藤プラネタリウム G1014si
オート投映だけでなく、マニュアル投映でも大変扱いやすいプラネタリウムとして賞賛された

投映機の大きさって？

誰しも、大きな機械のほうが多くの星空を映し出すと思うだろう。少なからず私自身はそう思っていた。五藤光学研究所には様々な種類の投映機がある。大きなドーム型スクリーンに投映するためには光源の明るさが必要だ。光が強ければ強いほど、より大きなドームに美しい星空を投映することができる。最近の投映機では光源にＬＥＤを用いたり、光ファイバーによる導光（どうこう）方式を採用したりすることで、投映機の大きさは各段に小さくなり、観覧する人の視野が広くなっている。

どうしてこの仕事に？

なぜ、プラネタリウムを科学館や博物館などで投映する側ではなく、製造する側の仕事を選んだのか。

明井さんは、子供の頃に父親から天体望遠鏡を買ってもらい、外で星空を見ていた。その時に通りがかった地域の方に「何見ているの？」と聞かれ、説明した際に喜びを感じ、天文に興味を持ったそうだ。明井さんは、星に関われる仕事がしたいという思いでプラネタリウムの投映機の製造会社である五藤光学研究所に入社したという。明井さんだけではなく、五藤光学研究所には天文・星が好きな社員さんが集まっていると明井さんはおっしゃっていた。天文や星が好きな社員さんがプラネタリウムの星空をより本物に近づけるよ

うに追及していると聞き、私は彼らの強い信念を感じた。

プラネタリウムの未来って？

この先、プラネタリウムはどうなっていくのだろうか。明井さん曰くそれは「本物の星空や空間に近づけるための歩みを止めない」ということだった。私たちが眺めている星空（星の並びや星座の形）が突然変化することはない。そのため、プラネタリウムの基本的な仕組みは変える必要はない。しかし、かつては地球上から眺める星空を紹介することが中心だったプラネタリウムが、今では地球を離れ、宇宙空間から地球を眺める事が可能となり、太陽系の各惑星の動きや銀河系を俯瞰（ふかん）することもできるようになっている。またコンピューターなどの進化によって、ドーム型スクリーン上での映像表現も各段に向上した。かつては周囲の風景を静止画でしか表現することができなかったが、今では、動画で表現することができるようになり、マンションの明かりが点滅したり、飛行機が飛んでいる様子を表現したりすることが可能になっている。プラネタリウムの見せ方の幅が広がることによって、今まで以上に本物のような星空と空間を体感できるようになると思うと、プラネタリウムの今後が楽しみでならない。

明るくギラギラと輝く星空を投映することができるスーパー・ヘリオス

地域の方へ

多摩地域には360度星空を見渡せる夜景スポットも多く、また、星空を観察できる場所もある。実際の夜空に輝く星の見え方と、プラネタリウムという漆黒の疑似空間の中で見る星空の違いを、ぜひ確かめてほしい。

そして、「プラネタリウムをきっかけに、実際の夜空を眺めたり、天文現象に興味を抱いたり、さらには自分たちの住む地球について考えるなど、ご自身たちの身の回りの環境の中での様々な気づきを発見してみてください」と明井さん・今井さんはおっしゃった。

星の明るさだけでなく色彩までも再現した、世界初の光学式プラネタリウムのケイロンIII

＊＊＊

五藤光学研究所のプラネタリウム投映機を取材し、プラネタリウムの裏の裏側を知ることができた。この取材を通して、プラネタリウムを訪れた際には、投映機に目を向け、そこから放たれるリアルな星の姿に感動していただきたい。

最後に、金子みすゞさんの『星とたんぽぽ』の一節より

見えぬけれどもあるんだよ
見えぬものでもあるんだよ

という言葉を贈る。今となっては見えなくなってしまった星も地球のどこかにはあって、今見上げて、見えている星以外にも、地球のどこかには見える星があることをプラネタリウムは教えてくれているのだろう。

野口 愛由（経済学科2年）＝文・写真

綺麗な星空がカラフルな星座とともに
プラネタリウムに投映されている
（写真提供：府中市郷土の森博物館）

訪れる人々を大切に
地域を大切に
輝き続ける星の空間

～府中市郷土の森博物館　プラネタリウム～

東京都府中市にある「府中市郷土の森博物館」は、自然、歴史、文化など様々な分野を学ぶことができる総合博物館である。地域の人々だけでなく、遠方からも大勢の人が訪れる魅力溢れる場所だ。来館する多くの人々に人気があるのは、館内にあるプラネタリウムである。

温かい歓迎

11月下旬、東京都府中市にある分倍河原駅から歩いて約20分。人々の賑やかな声がしてきた。入場する前から周囲は人々の温かな雰囲気に包まれており、初めて訪れた一人で心細い私を、優しく出迎えてくれた。

入場してすぐ右側には、プラネタリウムが設置されている博物館本館があり、奥の方に進むと広い園内には豊かな自然の中に歴史的な建造物が数多く立ち並ぶ。

素敵な星の空間

今回、私はプラネタリウムを取材した。投映10分前から入口にはたくさんの来館客が並んでいた。職員の方々は私を温かい笑顔で迎えてくださった。プラネタリウム内は「郷土の森園内で星を見ている」イメージで、イスは緑色で園内に生えている植物、壁は建物のレンガ、床は茶色で地面を表現している。

▲プラネタリウム室内の写真
緑色のイスは植物、壁面はレンガ、床は地面のイメージ
（写真提供：府中市郷土の森博物館）

宇宙樹に飾られているカプセル
カプセルの中に入っている作品は
約半年ごとに変わる

私が見た投映内容は生解説プラネタリウム「星空旅行[※1]　～世界の名所編～」。府中市から世界に飛び立ち、各地の名所を訪れながら星を楽しむという番組である。私は映像を見たとき、第一に星のリアルさに驚かされた。ダイナミックな世界名所の映像と、解説員の生解説とともに綺麗な星空がドームいっぱいに広がっていた。それはとても贅沢な体験であった。以前から国によって星の見え方が違うという知識はあったが、生解説を聴くことによってあらためて学ぶことができた。

他の国の星空を知って、自分の住んでいる場所から見える星空は、特別なものであるということに気づかされた。

地域の人々との繋がり

私がプラネタリウムロビーを訪れたとき、「宇宙樹（うちゅうじゅ）」という樹が目に止まった。その樹の枝からはたくさんのカプセルが吊るされていた。カプセルの中にはワークショップに参加した人々の作品が入っているという。約半年ごとに行（おこな）うため、カプセルの中に入っている作品は都度、変わるそうだ。新たな宇宙樹を見に、何度も訪れたくなる。

それだけではなく、市内や近隣の小学校などで出張観望会の開催や、プラネタリウム内にあるステージを利用して講演会や演奏会なども行（おこな）っているという。地域の人々との交流を大切にしているということを強く実感することができた。

身近で働く人にインタビュー
～上野アイ子さん～

来館者や地域に愛される場所は、そこで働く人々の支えがあってこそ成り立つものである。私は、実際に「府中市郷土の森博物館」のプラネタリウムで働いている、学芸員の上野アイ子さんに貴重なお話を聞かせていただいた。

幼い頃の星との出会い

子どもの時から星が好きで、家にあった双眼鏡で星を見て過ごしていた上野さん。小学生の頃には近くのプラネタリウムに学習[※2]投映を見にいったり、学校の授業で天文分野を学んで、未知の世界に凄くワクワクしたそうだ。こうした経験から、星や宇宙の面白さ、不思議さを伝えることができる仕事に携わりたいと思うようになったという。

▲学芸員の上野アイ子さん
にこやかな笑顔で迎え入れてくださった

新たな気づきを通しての喜び

実際にこの仕事に携わったことで、来館者に星空の魅力を伝える難しさを実感したそうだ。「自分が面白いと思っていることはお客様にとっては面白いとは限らない。だから、お客様が何を求めているのかということを最優先に考えて、番組[※3]制作を行うようになった」とおっしゃっていた。

実際に番組を見たお客さんが投映後に「今日の夜、星を見てみますね」

※１時期によって投映内容は異なります
※２小学校や中学校の授業に合わせた番組内容を投映すること
※３プラネタリウムで投映する番組内容を制作すること

と声を掛けてくださったとき、「この仕事をやっていて良かったな」とやりがいを感じるそうだ。

プラネタリウムで働く魅力

この仕事は、星空と人を繋ぐ架け橋となっている。上野さんはそこに魅力を感じるという。さらに、自分の伝えたいことが実際に来館者に届いたときの喜びも、魅力のひとつだ。

上野さんが思う「府中市郷土の森博物館」のプラネタリウムの魅力は大きく分けて三つ。一つ目は機械と設備だ。より本物に近い美しい星空を再現できる「ケイロンⅢ」という投映機を導入している。さらに、宇宙空間の迫力ある映像をダイナミックに映すことができる4Kプロジェクターもあり、とても充実している。

二つ目は投映内容だ。来館者の年齢層に合わせた番組のラインナップを数多く揃え、あらゆる世代の方に星空への興味や関心を高めてもらえるような内容を用意している。

三つ目は総合博物館ということで、天文分野だけでなく、他の分野の学芸員たちと協力して、歴史書・民俗的な視点から星や宇宙のことをプラネタリウムで紹介することができる点だ。実際に七夕投映の時は、天の川のことが書いてある古記録を使って番組制作を行ったりしているそうだ。

今後の目標と来館者への思い

「今後は、よりお客様のニーズに合った企画や投映をできるように、情報収集だったり、自分の天文分野に対する勉強をさらに高めていき、より良いものを届けられるようにしていきたい。これからも幅広いお客様に楽しんでいただけるような番組やイベントをご用意しているので、自然溢れる園内とともに、満天の星をお楽しみください」と笑顔でおっしゃっていた。

＊ ＊ ＊

私は、「府中市郷土の森博物館プラネタリウム」を訪れて、働く方々の温もりを強く感じた。同時に、地域の子どもたちや家族、訪れる人々の温もりも感じることができた。

プラネタリウムは、リアリティーの高い壮大な星空で私たちを感動させてくれる。私は、その空間の居心地の良さに「ずっと、ここで綺麗な星空を眺めていたい」と思うほど夢中になった。

上野さんのインタビューを通して、この仕事の魅力を深く知るとともに、人が星に興味を持つきっかけを作るという仕事の偉大さに気づいた。自分の好きなことを他人の興味に結びつけることは決して簡単なことではないと思う。しかし、それを実現できたとき、人と人との繋がりは作られるのかもしれない。プラネタリウムでの仕事は人々を繋ぐ素晴らしい仕事だと感じた。

地域や訪れる人々を大切に、温かく包み込む星の空間は、今日も綺麗な星を輝かせ、来館者を笑顔にしている。

祝ちとせ（人間文化学科1年）

＝文・写真

プラネタリウム入口の写真
この中では、様々な番組が投映されている

夜空の画家

多摩センターを彩るイルミネーション

群青色の光の楽園

11月の夕方、私は多摩市の多摩センター駅周辺で開催されている、多摩センターイルミネーションの会場へ向かうため京王線に乗車していた。電車の窓から外を眺めると、日が沈み群青色の空が広がっている。

京王多摩センター駅のホームで下車し、改札を出てパルテノン大通りに向かう。大通りの入口ではハローキティの大きなオブジェが迎えてくれる。その前は記念撮影をするカップルや親子で賑わっていた。その様子を横目に自宅へ帰宅するであろうサラリーマンや学生とすれ違いながら、イルミネーションによって色づけられているパルテノン大通りを進む。

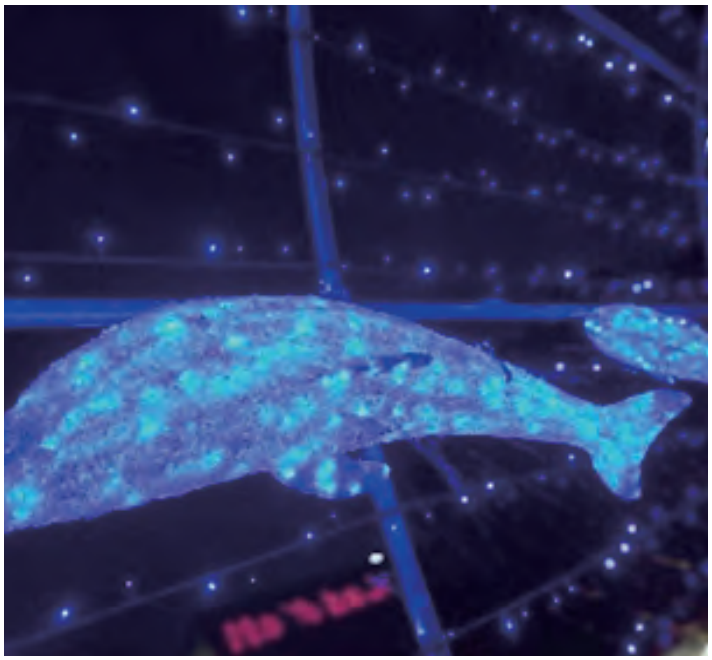
坂道になっているこの通りには、青いアーチ状のトンネルに魚のオブジェが吊るされており、幻想的な光景が広がる。歩みを進めトンネルを抜けた先で振り向くと、ハローキティが小さく見える。随分歩いたのだろう。

再び、坂を上ると、親子やカップル、学生が増えてきた。ゲームセンターやショッピングモールがあるからかと、ふいに思った。そんな想像を膨らませながら歩いていると先ほどまでとは打って変わった新しい世界が目に飛び込んできた。パンダ、フラミンゴ、トナカイなど様々な動物たちのオブジェだ。仲が良さそうに、通る人々を見守りながらそれぞれの色を放っている。

気がつけば坂道は終わりを告げ、建物二階程の高さがある大きなクリスマスツリーが目の前にあった。輝くツリーは、その奥に見えるサンリオピューロランドと同じぐらいの存在感であった。

ところで皆さんは、冬の夜空を美しく輝かせるために活躍する人々のことを考えたことはあるだろうか。今回は、多摩センターの冬の夜空を色づける画家ともいえるであろう、多摩センターイルミネーション実行委員会事務局（以下「事務局」という。）の方にお話を伺った。

▲トナカイのオブジェ



▲アーチ状のトンネルの中

光で繋ぐ想い

多摩センターイルミネーションは、「多摩センターイルミネーション実行委員会」（以下「実行委員会」※という。）の事業として、２００１年から「多摩センター地区の活性化」をコンセプトに毎年、実施されている。イルミネーションの内容は毎年少しずつ変えているそうだ。

私が坂道を上る際にくぐり、光の中を魚たちと泳いでいるよう気持ちになった青色のトンネルは、事務局の方によると、「光の水族館」をイメージしているとのことだ。そして青色のトンネルの先には動物達のイルミネーションが設置されている。それは水族館の次のアイディアとして動物園をイメージしたイルミネーションを置こういうことになったのが理由だそうだ。水族館も動物園も楽しめるとは、一石二鳥である。

では、最初に迎えてくれたハローキティはどのような経緯で光の世界へ参加したのだろう。それは、多摩市が「ハローキティに会える街多摩センター」としてPRしており、そのキャッチフレーズを活かし、サンリオとのコラボが始まったことがきっかけである。そのおかげで、ツリーのみであった頃に比べ、ハローキティのオブジェを見ることを目的とする人々によって、今まで以上に人の流れが増えたという。

だが、サンリオキャラクターの中でも、２０２１年現在ハローキティ以外のキャラクターが置かれている場所は公道ではなく、私有地の敷地内となる。つまり、公道にいるのはハローキティだけである。私は驚くとともに、そのハローキティがどれほど特別なものなのか実感した。

このようなイルミネーションを実施する資金は、実行委員会の構成団体で出し合っており、大勢の協力の下で成り立っている。イルミネーションの開催にあたり、費用の負担は大きいが、その分クオリティの高いものが提供できる。こういったストリートイルミネーションは、訪れたすべての人が楽しめる。それができるのは、実行委員会の「大勢の人に喜んでもらいたい」という切実な思いがあるからだ。

一方で、事務局の方によると、多摩市の公道で開催しているために、制約があり、行政との連携が欠かせないという特徴があるそうだ。そこには、目には見えない事務局の努力や苦労があったのだ。

▲サンリオピューロランドが奥に見える

▶パルテノン大通りを彩る木々

※［構成：多摩商工会議所、公益財団法人多摩市文化振興財団、株式会社多摩テレビ、新都市センター開発株式会社、多摩センター地区連絡協議会］

ここから始まる

さて、皆さんは多摩センターイルミネーションのフォトコンテストをご存じだろうか。機会があれば、ぜひ参加してみてほしい。２０１９年までは撮影した写真をプリントして応募するプリント（写真）部門のみであり、また応募者は紙媒体を好む高齢の方が多かった。だが参加者は写真を紙媒体でプリントしなければならず費用や手間がかかる。

そこでＳＮＳの活用に力を入れ、２０２０年からインスタグラムでの投稿を可能としたＳＮＳ部門を設けた。スマートフォンから気軽に応募できるようになり、応募者自身の写真をプリントする費用の削減にもつながる。ＳＤＧｓの観点からもＳＮＳの活用は紙媒体を削減することができ、時代に合わせていくことの重要性が窺（うかが）える。このように、限られた費用の中で開催されているコンテストを最大限盛り上げていくためにもＳＮＳを活用している。

それに加え、事務局として情報発信についてもホームページよりもＳＮＳの方が良いのではないかとの考えを持っているそうだ。事務局の方によると、すぐに発信でき、一般の方々の声もすぐに聞けるＳＮＳは最新の情報を迅速に届けるために最適なツールだという。

特に新型コロナウイルスによってイベントの企画内容を変更することが多い現状において、ホームページ上では情報の更新に手間がかかり、迅速性があまりない。その反面、迅速性の高いＳＮＳの更新頻度や閲覧数はホームページよりも上回っているのが現状だ。新型コロナウイルスは、情報発信のためのＳＮＳ利用の促進のきっかけともなったといえるだろう。これらも一つの理由となり、事務局として一般の方々をホームページよりもＳＮＳに誘導しようという動きをとっているそうだ。

「既存のことではなく、新しいことに挑戦しなければならない」と、事務局の考えをお話しいただいた。

このように常に新たな取り組みを取り入れ、毎年開催されてきたイルミネーションだが、２０２０年に悲しい事件が起きた。パルテノン大通りに設置していた美しいオブジェが、合計10体も破壊されてしまったのだ。とても心苦しい事件であり、資金面においても大打撃であった。事務局としては「だからこそ、この出来事を告知しなければならない」と考え、事件についてはホームページだけでなく、ＳＮＳでも社会に広く発信することを試みた。すると、コメント欄での反響が大きく、励ましの声がたくさん集まった。このようなことは今までになかったことであり、とても支えになったそうだ。事務局の方は、この悲しみを「共有できて良かった」とおっしゃっていた。様々な人々と繋がりを持つことができるＳＮＳの良さが発揮されたエピソードだ。

今後も実行委員会は「多摩センター地区の活性化」を目標に様々な企業と連携しながら活動を続けていく。実行委員会の構成団体、そして事務局の方々は「様々な人に来てほしい」「この都市基盤を活かしていきたい」という気持ちを胸に抱いている。その想いはイルミネーションを通して、今後も多摩センターを色づけていくだろう。

＊　＊　＊

何気なく通り過ぎていた輝きは、それを支える画家によって彩られている。夜空をパレットに光を描く画家の作品を、一歩立ち止まって見てほしい。そして、彼らの思いを受け取って、寒い夜空の下で温かい心に包まれてほしい。

海老沼 美琴（社会学科２年）
＝文・写真

背景画像：パルテノン大通りから見えるツリー
＊記事内画像は全て２０２１年１１月２９日撮影

多摩地域の「顔」をのぞく

～移り変わる街の表情～

皆さんは、まちの「表情」を意識したことがあるだろうか。人と同じようにまちにも顔がある。そして、時間や季節などによってその表情を変える。今回私は、朝・夕方・夜のまちの風景を撮影することで、変化するまちの表情を追った。明るい時間との対比によって、特集テーマである「夜景と夜空」が浮かび上がる。

① 朝のバスターミナルと新宿方面

冬晴れと朝

①の写真は、帝京大学八王子キャンパス内にある、ソラティオスクエアという建物の12階から撮影したものだ。時刻は10時頃。写真下部のバスターミナルでは、学生を乗せたバスがせわしなく発着している。また、地平線の奥の方に注目してほしい。うっすらと確認できるビル群は、新宿だ。冬は空気が澄んでいるため、朝は特にキャンパスから遠く離れた新宿周辺のビル群が、地平線からひょっこりと顔を出す。これらのことは、意識しなければ気づくことのできない、多摩地域の冬の朝の「表情」だ。

続いて②の写真に注目してほしい。これは、①の写真と同じ建物の13階から撮影したものだ。朝の富士山と、その手前に連なる丹沢（たんざわ）の山々を映している。撮影を行ったのは11月の下旬である。富士山は頭から雪を被っていて、すっかり冬の装いだ。

② 朝の丹沢方面と富士山
9時頃撮影

私はこの光景を最初に見たとき、改めて富士山という山の大きさと壮麗（そうれい）さを知った。なぜ、今までそのことに気がつかなかったのだろう。そんな気持ちにさせてくれた風景だ。

一日の始まりである朝の時間。写真の撮影を行（おこな）った日は、「冬晴れ」という言葉がぴったりの、とても澄んだ美しい朝だった。登校する自分の気持ちが弾んでいることに気がつく。私の表情は、きっとこの日の朝の多摩の「表情」のように明るかったに違いない。まちの様子と人の心がリンクすることもある。そんなことを知った朝だった。

一瞬の表情

続いて、夕方の「表情」を見ていく。夕方は、昼と夜の境目の時間だ。そのため、朝とはまた違った表情を見せてくれる。③の写真は、11月下旬の18時頃に撮影した写真である。

まずは、右下のバスターミナルに注目してもらいたい。18時は、多くの学生が授業を終え、各々が帰路につく時間だ。そのため朝とは逆に、バスターミナルを発着するバスは学生を乗せては去っていく。

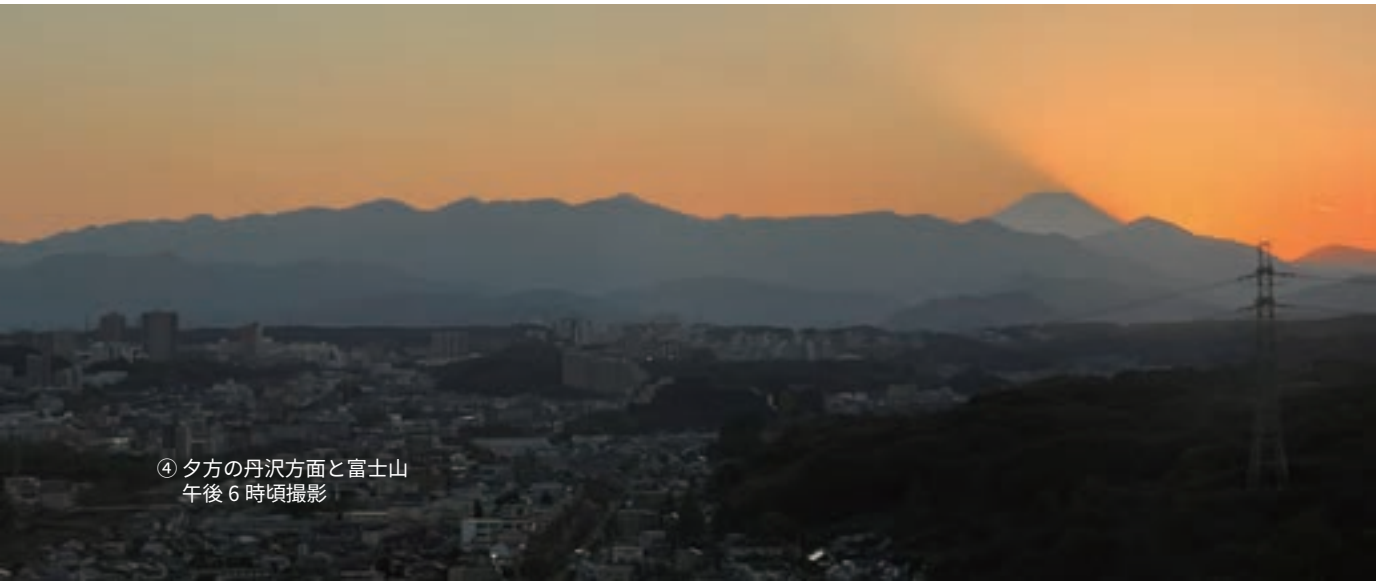
この時期は急に冷え込む時期でもある。足早に帰っていく学生からは「寒いから早く帰宅したい」という、心の声が聞こえてくる。しかしその気持ちをぐっと抑え、目線を変えて景色を見てほしいのだ。

④の写真は、朝とほとんど同じアングル（19ページ②）から撮影したものである。富士山の後ろに夕日が沈み、背後から光が放たれている。私は思わずこの景色に見とれてしまった。というのも、私はこの風景を、取材の途中で偶然発見したのである。だからこそ、見つけた時の感動も大きかった。こうした発見があるからこそ取材は楽しい。

夕方。それは昼と夜の境目の時間。一日が終わりに近づく時間―。

今回取材をして気がついたことがある。それは、夕方はとても短いということだ。当たり前のことかもしれないが、私はこのとても短い時間に、④の写真の様な美しい光景を見つけた。視点を変えてみれば新たに気がつく一面がある。空に映る一瞬の表情、それが夕方だ。

③５限が終わり、帰る学生がバスターミナルに溢れている



④夕方の丹沢方面と富士山
午後６時頃撮影

⑤キャンパスから望む夜の多摩と新宿

⑥キャンパス内のイルミネーション

暗いからこそ見えるもの

最後に、夜の「表情」を覗いてみよう。夜は、朝と違ってまちは闇に包まれる。また取材日が11月下旬ということもあり、クリスマスや新年に向けて、人々の心は弾み、まちはきらきらとしてくる。

⑤の写真は、夜の新宿方面を撮影したものだ。19時頃である。道路やビルの屋上では、赤や白の光の粒がきらめいていて、非常に幻想的な眺めを作っている。遠くに視線を移すと、うっすらと新宿周辺に赤い光が密集しているのが見える。帰路につく人、これから出かける人、ひとりひとりが作り出す光が集まって、このような輝く夜景が出来上がるのだ。

11月は、年末に向けて心がわくわくしてくる時期だ。まちを彩るイルミネーションが人々の胸をさらに高鳴らせる。帝京大学八王子キャンパスには巨大なモミの木があり、毎年クリスマスが近づくと、その年のテーマに合わせたライトアップが施される（⑥）。イルミネーションや色鮮やかで幻想的な夜景は、朝には見えなかったものだ。

夜には暗いからこそ見えるものがある。それが夜という時間の魅力なのだ。

＊＊＊

今回私は、まちの「表情」をテーマに、景色や季節の変化を追った。

この取材を通して、自分の見ている世界は意外な程に狭いことを知った。身近な建物であっても、少し上層階に足を延ばしてみるだけで、そこには夕方の壮麗な富士山のように、まったく違った世界が広がっている。そういったことに気がつけば、モノクロで無頓着な日々も、より彩りと好奇心に溢れるだろう。

三好龍之介（経済学科2年）

＝文・写真

夜景が語るニュータウンの営み
-京王堀之内駅周辺-

現在の京王堀之内駅
写真右側が北、左側が南
手前には大きな立体駐車場がある

新宿～八王子間を甲州街道沿いに繋ぐ京王線は、多摩地域に住む人々にとって欠かせない交通手段の一つである。「京王」とは東京の「京」と八王子の「王」の二文字をとって付けられた名前だ。

当初、路面電車として開業された京王線は、道路との交差を避けるために、現在に至るまで度重なる路線変更や地下化・高架化が実施された。20年ほど私の記憶を辿るだけでも、どの駅も、駅舎や駅周辺の変化は著しく、幼い頃に見ていた京王線とは別物だ。

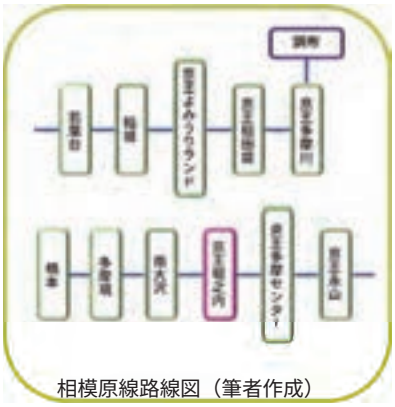
多摩ニュータウン開発

京王線は、調布駅から分岐して相模原線として神奈川県の橋本へ繋がる。相模原線は東京都の多摩ニュータウン計画に対応するために、通勤のルート整備として開通した。

今回取材をした相模原線の京王堀之内駅周辺も、多摩ニュータウン開発の計画に含まれた地域である。

多摩ニュータウン計画は、多摩市・八王子市・稲城市・町田市の4市にまたがる、約3000ヘクタールの土地造成と、その土地に約30万人を住まわせようという大規模な計画であった。この背景には、戦後の首都圏への人口集中による住宅難の解消と、民間企業などによる乱開発の防止という二つの目的があり、計画は急ピッチで進められた。

スタジオジブリの作品である「平成狸合戦ぽんぽこ」はこの多摩ニュータウン開発が題材となっている。



相模原線路線図（筆者作成）

酪農の堀之内

京王堀之内駅より北側の堀之内寺沢地区は、明治時代から酪農経営が活発な地域であった。そのため、この地域の多摩ニュータウン用地の買収は、現地の酪農家たちから激しい反発運動を受けた。その結果、この地区のニュータウン計画は変更されることとなり、酪農継続の希望者は酪農集約地区に集約され、この地区は新住宅市街地開発事業の区域から除外された。

堀之内の歴史を踏まえて駅周辺を見ると、たしかに駅を挟んで南側と北側で雰囲気が異なることに気づく。駅南側は、新住宅市街地開発事業区域であり、丘陵の斜面にはマンション群がオレンジ色に輝き、大規模商業施設である「ビア長池」も煌々と光を放っている。一方の北側は、木や川などの自然が多く、夜になると暗く静かな雰囲気である。

▲現在の京王堀之内駅の南側から南大沢方面を撮影
太陽が沈み、街に明かりが灯っていく

長池公園ゾーン

駅北側と異なり、南側はマンションが建ち並んでいるが、それは「景観に配慮されていない」ということではない。駅南側にある別所日枝神社、蓮正寺公園、長池公園が繋がる地区は「長池公園ゾーン」として、景観に配慮した開発がされている。

さらに、京王堀之内駅から隣駅である南大沢駅の南側は「ライブ長池地区」とされ、大きな池と小川と緑道のある落ち着いた雰囲気の住宅街となっている。

ニュータウンと人々の暮らし

多摩ニュータウン開発の歴史は、この地域で暮らす人々の歴史だ。人がそこに住むことで明かりが生まれる。夜景の明かりからは、人々の暮らしが想像できる。

京王堀之内駅周辺は自然と住宅が共存する、緑豊かなやすらぎの街だ。日中は太陽と緑、川のせせらぎの心地よさを感じることができる。日が暮れると徐々に明かりが灯り始め、人々の生活を通した温もりを感じることができる。

これからまた数十年経つ頃、この地域がどのように変化しているのか楽しみである。

寺澤頼来（心理学科3年）＝文・写真

◀ Top 写真とほぼ同じ方角から撮影された約 30 年前の京王堀之内駅の夕景（大石武朗氏撮影）
多くの人がこれから家へ向かうであろう帰宅ラッシュの様子が写り、当時の家族団らんシーンへの想像が膨らむ
駅前のバスロータリーがきれいに整備される以前の様子と、立体駐車場ができる前の姿を見ることができる

ある日の通学中、いつも通りたくさんの人で賑わう京王多摩センター駅で電車を降りた。大学へ向かうバスのロータリーにもたくさんの学生が並んでいて、これから乗るバスの混雑具合を想像すると早くもため息をつきたくなる。もともと人混みが苦手な私は、多摩センターを歩くたびに少し暗い気分になりながら通学している。

そんなとき、ミコタマの会議で夜景を特集しようということになった。初めは多摩地域の綺麗な夜空が撮れる場所を探していたが、その日の帰り道、満員のバスから解放され、京王多摩センター駅で次の電車を待っていたときにふと思った。こんなに賑わう多摩センターも、深夜になれば静かになるのかな。

そして 2021 年 11 月 15 日、私は真夜中の多摩センター駅周辺に足を踏み入れた。

18:43 京王多摩センター駅

深夜の多摩散歩

あなたの知らない　多摩センターの新たな魅力

表紙の写真のみ別日撮影（2021 年 12 月 8 日）

1:20 多摩センター駅 バスロータリー

1:41 パルテノン大通り

1:29 多摩センター駅 西口付近

1:59 タクシー乗り場

時刻は１時を周り、終電が過ぎた京王・小田急多摩センター駅のひと気はすっかりなくなっていた。当然のことながらいつも通学中に歩く道やバスロータリーは、普段は感じられない静寂に包まれている。

ふと笑い声が聞こえてきた。どうやら夜中まで営業しているお店があるようだ。彼らはどうやって帰るのだろうと思いながら足を進める。

通学で利用している京王線の改札はシャッターが下ろされていて、改札前の階段では清掃員の方たちが掃除をしていた。陰で支えてくれる人がいて、駅の清潔が保たれているのだ、とありがたみを深く感じた。

駅付近のタクシー乗り場には、ちらほらと人の姿が見られる。終電が過ぎてしまうまで働いていたのだろうか、ブリーフケースを持った男性やコートに身を包んだ女性たちがタクシーに乗り込んでいる姿が見える。

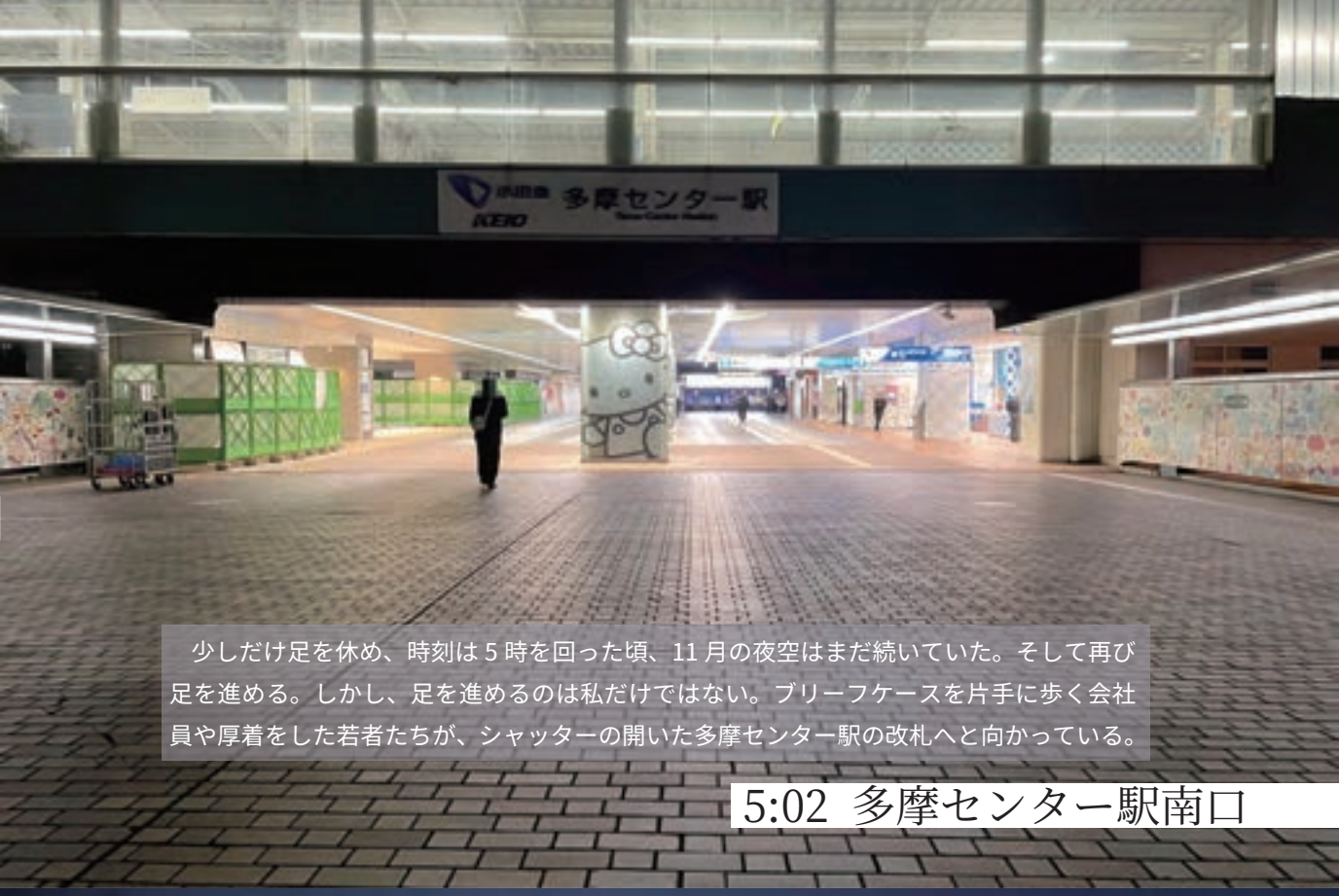
1:46 しまじろう広場

パルテノン大通りを曲がり、サンリオピューロランドの方向へ足を進めると、私の大好きな場所がある。イチョウの木が一面に広がる「しまじろう広場」だ。暗闇の中、黄色と若干の黄緑色の木々を見て、私の心は高揚する。

2:09 多摩モノレール通り（南側）

多摩センター駅周辺を南北に伸びる多摩モノレール通りにやってきた。
そんな大通りで動くのは車でも人でもなく、青、黄、赤の三色だけ。

2:13 多摩モノレール通り（北側）



少しだけ足を休め、時刻は5時を回った頃、11月の夜空はまだ続いていた。そして再び足を進める。しかし、足を進めるのは私だけではない。ブリーフケースを片手に歩く会社員や厚着をした若者たちが、シャッターの開いた多摩センター駅の改札へと向かっている。

5:02 多摩センター駅南口

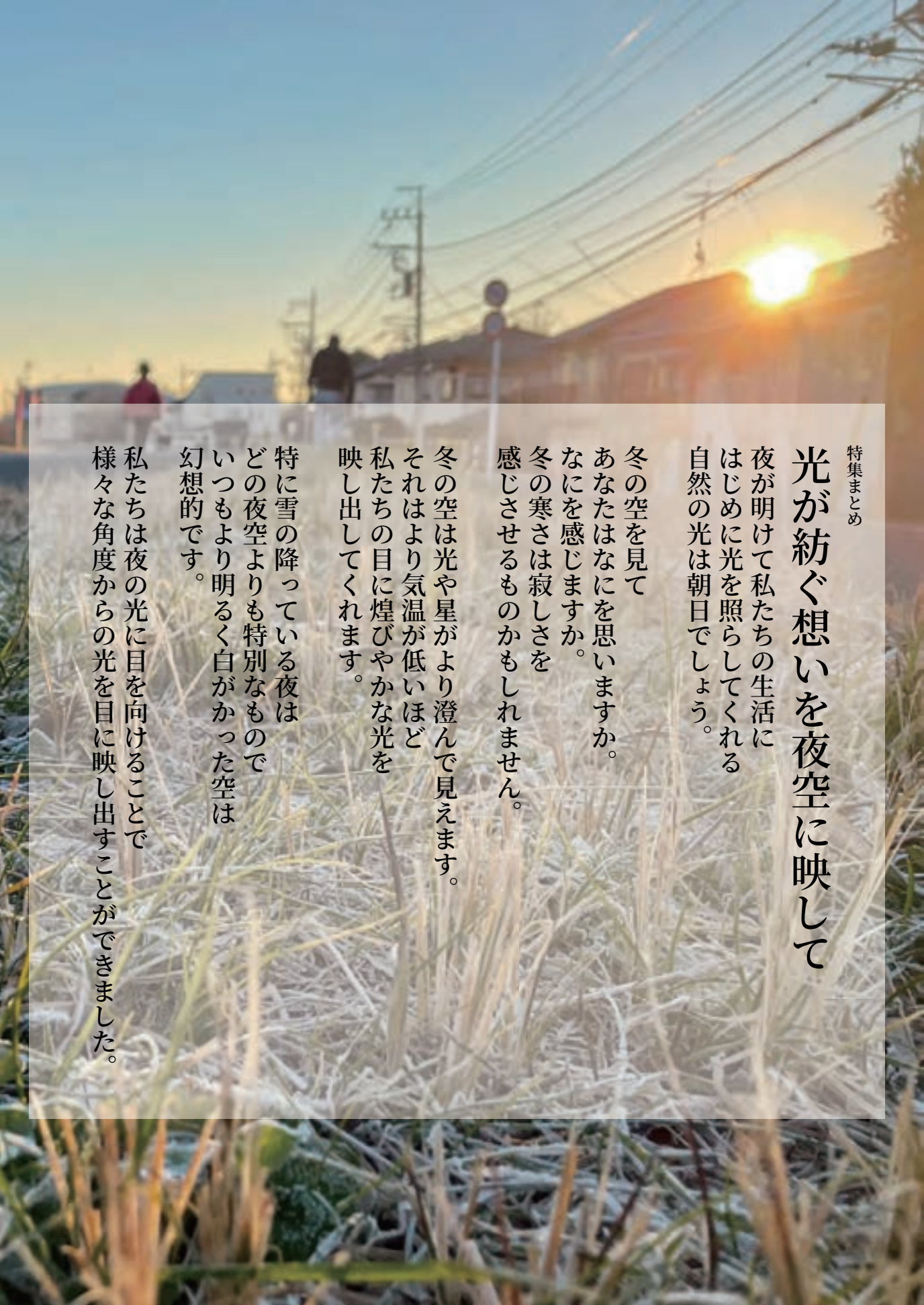
駅から少し歩いたところで、第2号でも取り上げられていた「きらめきの池」の存在を思い出す。今ならどんな多摩を映し出してくれるのだろう。そんな思いで訪れてみると、そこには今も忘れることのできない、とても幻想的な光景を目の当たりにした。

5:14 きらめきの池

時刻は朝６時が近づく頃、東の空が段々と水色に染まり始める。先ほどまでの幻想的な風景たちは、段々と見覚えのある景色に戻っていく。

今回、普段の賑やかな多摩センターとは一風変わった静かな姿を見ることができた。そしてここにしかない魅力的な光景や、普段過ごす中では出会えない人々の姿は、どれも忘れることができない思い出となった。

上原 有響（外国語学科２年）＝文・写真



特集まとめ

光が紡ぐ想いを夜空に映して

夜が明けて私たちの生活に
はじめに光を照らしてくれる
自然の光は朝日でしょう。

冬の空を見て
あなたはなにを思いますか。
なにを感じますか。
冬の寒さは寂しさを
感じさせるものかもしれません。

冬の空は光や星がより澄んで見えます。
それはより気温が低いほど
私たちの目に煌びやかな光を
映し出してくれます。

特に雪の降っている夜は
どの夜空よりも特別なもので
いつもより明るく白がかった空は
幻想的です。

私たちは夜の光に目を向けることで
様々な角度からの光を目に映し出すことができました。

早朝の多摩川河川敷。東の空に朝日が昇り始めている (2022 年 1 月 7 日)

秋を感じる

それぞれの秋

秋といえば、食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋。山形県出身の私にとっては芋煮の秋だ。皆さんにとっての秋は何だろうか？

私は、第3号の記事を作成するにあたり、「今いる場所で今しか感じられない秋を記事にしたい！」そう思い、何ができるのか考えた。そこで思いついたのが「芸術の秋」である。色鮮やかな秋の植物を芸術にしてみようと思い立った。そこでさっそく帝京大学八王子キャンパス内を観察してみることにした。

帝京大学の秋

八王子キャンパスのランドマークとも言えるソラティオスクエア。私たちミコタマ編集部が会議で集まる帝京大学総合博物館は、ソラティオスクエアの地下1階にある。博物館を出て1階に上がり東側に出るとバス停までのエスカレーターがあり、目の前にはシラカシとクチナシが並んでいる。周りに落ちている葉を触ってみると少し硬くてしっかりしている。

一方で、ソラティオスクエアから西側に出ると、大きなモミの木がある。帝京大学では秋になるとクリスマスツリーに姿を変える。夕方になると、八王子キャンパス横にある帝京大学幼稚園の子どもたちがクリスマスツリーの前で楽しそうに写真を撮っていて、思わず微笑んでしまう。

クラブ棟の隣には、1本のイチョウの木がある。学内唯一のイチョウの木だ。黄色く色づいて秋を感じることができる。鮮やかな黄葉に惹かれたのだろうか、木の前で写真を撮っている人を何度か見たことがある。

芸術の秋を知る

秋の植物を使った芸術は何があるのだろうと思い、インターネットで調べてみた。色々調べ、少ない材料で誰でもできる「落ち葉アート」と「切り絵」をやってみることにした。何が作られているのかSNSを見てみると、落ち葉を集めて作られたハートの形やキャラクターの顔、切り絵の動物たち。どれも難しそう…。

一人でやるのは大変そうだったため、ミコタマ編集部メンバーに協力してもらい、午前に落ち葉アート、午後には切り絵に挑戦した。

▲赤やピンクに色づくコムラサキとガマズミ（左、中）

▲構内で見つけたねこじゃらし

てぃーぼーをつくろう

まずは、落ち葉アートだ。実行日となった11月19日の10時半頃はちょうど良く晴れていて落ち葉アートには、もってこいの天気となった。せっかく作るなら私たちに馴染み深いキャラクターを作ろう、ということで我らが帝京大学八王子キャンパスのマスコットキャラクター「てぃーぼー」を作ることに決定した。てぃーぼーは情熱を連想させる炎がモチーフのキャラクターのため、赤色や黄色が多く使われている。学内にある黄色の葉といえばイチョウだ。イチョウの葉を使うことにした私たちは、ほうきとちりとり、ビニール袋を持ってイチョウの木のもとへ―。

▲帝京大学八王子キャンパスのマスコットキャラクターてぃーぼー

はじめにイチョウの木の周りに落ちているたくさんの黄色の葉を集めていく。落ち葉一枚はとても軽いがたくさん集まると結構な重さになり、持つのが大変になってくる。それでもなんとか40リットルのビニール袋がいっぱいになるくらいまで集めることができた。集めた葉をキャンパス内の広場に持って行き、落ち葉アートを作り始める。インターネットでてぃーぼーの顔の色を確認し、集めてきた黄色の葉と広場に落ちていた赤色の葉を盛ったり減らしたりして輪郭を作っていく。あとは炎を丁寧に形作り、顔を作る必要がある。メンバーの一人に炎の形成を任せて、私は顔のパーツとなる木の枝を探しに行った。近くに細くて顔のパーツを作るのにぴったりな枝があったので、それを使うことにして枝を上手に組み合わせ、笑っている目を作る。口には色をつけるために明るい赤色の葉を刻んで撒(ま)いていく。キャラクターの顔に似せるのはなかなか難しい。何度か試行錯誤すると、顔ができあがってくる。あとは炎を完成させるだけなのだが、炎が燃えている様子を表現することが難しく、とても苦戦した。盛っては形作ってを繰り返してどうにか完成させることができた。

▲赤い葉が落ちていた広場

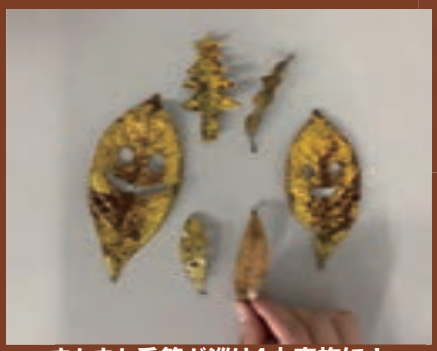
▲意外と似ている！？てぃーぼーの完成

▲こだわって作った目と口

お花を渡す左の子

季節が巡り3人家族に！

お花を受け取る右の子



またまた季節が巡り4人家族に！

葉っぱ家族の物語

午後からは博物館で落ち葉を使った切り絵をした。拾ってきた落ち葉は、触ってみると固くて丈夫そうで、切り絵に適しているように感じた。テーマを決めずに、まずは自分たちで出来そうな形にカッターで切ってみることにした。

葉の真ん中の筋を利用し、本雑誌名であるMICOTAMAの文字を作る。さらに、顔を作ってみよう、ということになり、各々が好きな表情を作り始めた。笑っている顔、怒っている顔、真顔。丸い目にするのも細い目にするのも工夫が必要だ。よく見ると葉は一枚一枚、色やサイズ、固さも違っていて、どれも同じではない。他にも魚の形やハートの形を作っていく。

持ってきた葉を一通り切り終えたところで、完成した作品を合わせてお話を考えた。このように、誰かと一緒に切り絵をして物語を考えるのは楽しい時間だ。私も久しぶりの工作で童心を思い出し、時間も忘れて楽しんだ。

▲落ち葉を切って作った「MICOTAMA」の文字とサンマ

▲拾ってきた落ち葉

秋を彩る葉

今回、制作の材料に使ったイチョウは、イチョウ科イチョウ属の落葉樹である。秋になると赤色や黄色等に色を変える。東京都立川市と昭島市に位置する国営公園「国営昭和記念公園」や八王子市内の甲州街道では、紅葉シーズンになると綺麗に色づいたイチョウ並木を見ることができる。また、八王子市では毎年秋に、八王子いちょう祭りが開催される。このように、イチョウは私たちの生活のすぐそばにあるのだ。

◀帝京大学メディアライブラリーセンター近くのイチョウの木

初めての秋

今回のミコタマ第3号の製作を通して様々な「初めて」に触れることができた。ソラティオスクエアを東側に出ると多くの学生、先生方はエスカレーターを使ってバス停まで降りることだろう。私は初めて階段の方を歩いてみることで、細い道を発見した。赤、緑の葉やピンク色の実もなっている、秋を感じられるとても暖かな道である。3年間大学に通っていて初めて見つけた。このように日常の中で少し視点を変えるだけで、見えてこなかったものが見えるようになる。これは秋だけでなく、どの季節でもいえることだろう。いつもの道で立ち止まってみると今まで見えなかった素敵な世界が広がっているかもしれない。

工藤玲奈（経営学科3年）＝文・写真

▲秋の植物で色づくバス停まで続く階段

▲階段の中ほどにある暖かな道

天然理心流と井上源三郎

▲井上源三郎資料館の入口。二階に天然理心流井上源三郎道場がある

大学入学を機に祖母の家がある東京都日野市に住み始めた。日野市は幕末の京都等で活躍した新選組ゆかりの地である。

私は日本の歴史が好きだったこともあり、常日頃から新選組について詳しく知りたいと思っていた。そこで日野市出身のミコタマ編集部メンバーに相談したところ、近藤勇、土方歳三、沖田総司らが会得した天然理心流という剣術の流派があり、今でも伝承している道場があることを教えてもらった。

その道場の名前は天然理心流・井上源三郎道場という。道場では新選組六番隊隊長であった井上源三郎の五代目子孫の井上雅雄さんが会長を務めているそうだ。併せて井上源三郎資料館も運営されている。私は、新選組の新しい一面を学ぶ絶好の機会だ、とワクワクしながら道場を訪れた。

井上雅雄さんの生い立ち

18時。住宅街を歩いていくと、視線の先に「誠」の文字が大きく掲げられた建物を見つけた。天然理心流・井上源三郎道場である。「二階が道場ですよ」と優しく声をかけて下さった体格のいい穏やかそうな人が井上雅雄さんだった。井上さんは、日野市日野本町にある八坂神社の三代目宮司土淵英夫氏から剣道の手ほどきを10歳頃から習っていたそうだ。15年ほど前から天然理心流を伝えるために剣術を修錬しているという。併せて井上源三郎資料館を設立し、井上源三郎と源三郎の兄であり、八王子千人同心[※1]の石坂弥次右衛門組世話役を勤めた松五郎らの活躍を伝えるため活動されている。とても気さくな方で、稽古中にも関わらず親切に対応して下さった。

▲お話を伺った井上源三郎道場会長・井上源三郎資料館館長であり五代目子孫の井上雅雄さん

剣豪と恐れられた井上源三郎

天然理心流について話を伺う前に、井上さんが井上源三郎について教えて下さった。

井上源三郎は、慶応四年（1829年）多摩郡日野宿北原、井上藤左衛門の三男として生まれた。源三郎と兄松五郎は、幼年期から八王子千人同心である日野嘉蔵義貴の寺子屋で学業を修めている。剣術は、弘化三年（1847）に近藤周助に入門修練を積み、嘉永元年（1848）三月には、切紙・目録、安政二（1856）

※１八王子千人同心：江戸を守るために八王子に配備された武士の集団。

年三月には、中極位目録、万延元年（1860）五月には、免許を受けている。

井上家菩提寺の臨済宗宝泉寺の境内に立つ「井上源三郎之碑」の裏には「性真摯篤実寡黙実行の人」と刻まれてある。「温厚で誠実な源三郎は、最後まで隊士から信頼され、武士道精神を貫いた「新選組六番隊長」だったと思う。」と井上さんはおっしゃる。

また井上源三郎は実践で勝負をするときは「脳天を真二つにされる」と言われるほどの剣豪だったそうだ。彼の気合いを込めた最初の一撃をまともに受けられる人は一人もいなかったそうで、近藤勇をも圧倒する実力を持っていた。あわせて人格的にも実直であったことから、近藤勇、土方歳三からも絶大な信頼を得ていたそうだ。

名前のみ知っていた井上源三郎だったが、実際にお話を聞いて人柄に触れてみると、人間的に寛大であり、寛容な人という印象を受けた。

道場と資料館の創設理由

2004年のNHK大河ドラマ「新選組！」の放映を機に日野市の活性化に取り組むために日野市からの依頼で井上さんの自宅に残されていた新選組関係の品々を公開する目的のために資料館を設立したそうだ。開館は2004年1月で、最初は自宅の蔵を資料館として使用していたそうだが、土蔵の蔵だったため温度・湿度の調整がしにくく展示していた貴重な史料が傷んでしまった。そのため、資料館を立て直したそうだ。現在は井上源三郎資料館が一階に、二階には井上源三郎道場がある。

「骨を切らせて殺せ」

天然理心流は江戸時代後期の剣術家であった近藤内蔵之助（くらのすけ）が始めたとされる総合武道であり、剣術、柔術、棒術、気合術等から構成されている。

天然理心流の気合術は二代目の近藤三助（さんすけ）の時に途切れたが、大きい声を出し相手の動きを封じた術だといわれている。その他については今でも継承されている。

天然理心流の特徴は、「先々の先で勝つ」ことだという。加えて、実践主義であり、すね打ちなどを行っても卑怯とされない何でもありの世界だそうだ。

特に衝撃的だったのは、「骨を切らせて殺せ」という言葉だった。殺

▲木刀を使っての練習風景。迫力があり、圧倒された

▲天然理心流の剣術の一つ　虎尾剣

▲天然理心流の剣術の一つ　五月雨剣

さなければ殺される世界に身を置いた新選組にとって、絶対に人を殺すための術として身に着けるべき流派だったということを実感した。

「やぁ!!」

稽古中の井上源三郎道場は木刀がぶつかる音や、「やぁ!!」という声が道場に響き渡り、とても熱気がある。力の籠った稽古は迫力があり、私は身が引き締まる思いがした。女性も男性と同じように練習しており、互いに教え合うなど厳しい中にも和やかな雰囲気を感じた。

▲柔術の練習風景

歴史の一片

後日、資料館にも伺った。資料館には、源三郎や兄の松五郎らが残した新選組ゆかりの手紙や刀などが展示されている。

それらについて井上さんが詳しく説明してくださった。

残された手紙からは、松五郎を新選組の面々が頼りにしていたことや、土方歳三らが松五郎に新選組の初代筆頭局長であった芹沢鴨（せりざわかも）の暗殺の相談を行っていたことが読み取れると教えていただいた。説明を受けて、私は新選組隊士からも大変尊敬されていた松五郎に畏敬（いけい）の念を抱いた。

▲近藤勇が源三郎の兄、松五郎に贈った大和守源秀國。戦後の刀剣接収を免れた

資料館の入り口近くには、天然理心流で使っている木刀を触ることができるスペースが設けられていた。一般的な木刀は1キログラムに満たないものが多い。だが、天然理心流の木刀は1.5キログラムもある。私も実際に両手で持ってみると、想像していたよりも太く、重かったために五分と持っていることができなかった。この木刀で剣の修行のために素振りを何千回と行っていたことを想像すると、天然理心流を会得（えとく）していた当時の人々は、今では想像もつかない頑強さや強い精神力を持っていたのだろう。

▲一番上が天然理心流で使われている木刀。私には重すぎて、一度も振り上げることが出来なかった

＊＊＊

井上さんに将来的な展望を伺ったところ、「新選組の大きな力となっていた井上源三郎や、その兄である松五郎の存在だけでなく、天然理心流を後世まで伝え、残していきたい。」と仰っていた。世間一般に知られている新選組隊士以外にも活躍した隊士が多く存在していたこと。天然理心流を後世に伝えた人や、それを現代においても伝え続けている人がいること。そうしたことから歴史を感じた取材だった。

荒井涼花（史学科1年）＝文・写真

▲温泉スタンドの看板

▲地面を掘る際に使用された櫓

温泉を掘りあてた家

▲温泉が出てくる部分

▲温泉をバケツに溜めている様子

▲実際の足湯の様子

▲私と清水裕介さん

▲お金を入れる部分

▲温泉分析表

多摩都市モノレール線の「大塚・帝京大学」駅から徒歩約10分。私たちの大学近くには珍しい場所がある。駅から歩いてくる学生や自転車で帝京大学へ通う学生、帝京大学付近に住んでいる方は目にしたことがあるかもしれないが、「塩釜温泉観音の湯」という場所がある。

そこにあるのは温泉施設ではなく、温泉が出てくるタンクのみである。「塩釜温泉　観音の湯」はガソリンスタンドならぬ温泉スタンドなのだ。温泉スタンドというものに初めて出くわし、私は興味が湧いた。

今回はその温泉スタンドを営んでいらっしゃる、清水産業株式会社代表取締役の清水裕介さんにお話を伺った。

遊び心満載の場所

温泉マークが描かれている大きな赤い球体が、住宅街で一際存在感を放っている。看板には青い文字で「塩釜温泉　観音の湯」と書かれている。敷地内に入るとまず、温泉を掘る際に使用する大きな櫓が目に入ってくる。その櫓をよく見てみると、中間あたりの高さに人形が立っている。ここに人形を置いた人はなんとも遊び心のある方だ。

温泉が出てくるスタンドに近づくと、裏にある約2、3メートルの太くて長いタンクが目につく。

温泉スタンドにコインを投入すると、温泉が勢いよく出てくる。コインの入れ方が特殊で、100円玉を丸の形にすっぽりはめて下に落とすようになっている。20リットルの販売で値段が400円だ（2022年2月時点）。この時、私はコインの入れる場所が分からず困惑した。温泉施設にいざ行くとなると相場は700円だが、ここの温泉を購入すればそれよりも安く、なおかつ家で温泉気分を楽しめる。

また、温泉スタンドでは宅配サービスも行っている。そのため、フードデリバリーのように手軽に家で、お風呂のひと時を満喫することができるのだ。コロナ禍で外出しづらい現在にはもってこいだ。

塩釜温泉の歴史

温泉を自宅に掘ろうとした経緯を伺った。亡くなった裕介さんのお父様清水武雄さんはかつて井戸掘りをしていた。武雄さんが最後に夢を探した結果、思いついたのが、「自宅の庭を掘り温泉を掘り起こすこと」だった。その結果、なんと宣言通り温泉が出たそうだ。こうして今のような、温泉を私宅や施設に提供する温泉スタンドになったのだ。私には最後まで夢を追いかける姿勢が格好良く思えた。私も命尽きるまで夢を追いかけようと思った。

裕介さんに、自宅に温泉を掘っていた当時のお話を伺った。岩盤に当たった時は振動が大きく家中のドアがガタガタと揺れていたそうだ。また、掘っていく途中に天然ガスが出てきたらしく、「火をつけると燃えて驚いたというエピソードは鮮明に焼きついています。」と笑いながら話してくれた。

ここで出た温泉はどこで入れますか。と尋ねた。現在は、温泉スタンドからポリタンクなどにお客さんが詰める形式で販売をしている。以前は八王子市にある温浴施設の「高尾の湯　ふろッぴィ」にお湯を納めていた。しかし、「高尾の湯　ふろッぴィ」が閉店してしまったため、今は老人ホームに納めているそう。

お客さんはどのような人が来るのかと尋ねると、裕介さんは遠くから来るお客さんのお話をしてくれた。そのお客さんには皮膚炎を患っているお子さんがいて、どれを試しても症状が治まらなくて困っていた。そこでここの温泉を試したところ、なんとピタッと症状が治まり良くなったのだそう

テレビ出演も多かったお父様

今回の取材は玄関で行った。玄関は置物や写真でいっぱいだった。その中で、タレントの堺正章さんと清水武雄さんの写った写真が目に入ったため、質問をしてみた。

武雄さんはテレビ番組「世界の子供がSOS！THE☆仕事人バンク　マチャアキJAPAN」でケニア、ウガンダに井戸掘りに行ったことがあるそうだ。その当時、武雄さんは長い期間上総堀り（掘り抜き井戸の代表的な工法。櫓を組んで大きい車を仕掛け、これに割り竹を長くつないだものを巻き付けておき、その竹の先端に取り付けた堀鉄管で掘り抜く。）をケニア、ウガンダなどの現地の方に教えていた。

武雄さんはその後で、体調を悪くして短期入院することになってしまった。その時には、堺さんがテレビ番組の司会者であったことから、なんとお見舞いに来てくださったそうだ。これ以外にも、武雄さんはテレビ出演をしていたとのことだった。

多摩地域の方に伝えたいこと

多摩地域に住む人に言いたいこと、伝えたいことや願望を伺ってみた。すると、「人との繋がりを大切にしたい。」と裕介さんはおっしゃった。最近は新しい人との交流がなくなっているという。地域やご近所付き合いが希薄になっていると感じるそうだ。そんな中で新しい人と昔からいる人の交流の場があれば良いと感じるとのことだ。

日本一狭い足湯

実際に温泉に触れてみた。まず、温泉を入れるためのバケツを買いに大学近辺のスーパーマーケットへ。そこでバケツを購入し、早速温泉スタンドまで向かった。400円を入れると赤くランプが光り、勢いよく黄土色の温泉が出てきた。即座にバケツに温泉を汲んだ。バケツに入った温泉は程よく温かく、少々かじかんだ私の手を温めてくれた。

汲んだ温泉を持ちながら帝京大学にある急な坂を上り、入口まで息を切らしながら向かった。歩くこと5分。バケツと椅子と、大学職員の方が用意してくれた温泉を入れるための桶を運び、外に出て足湯を堪能した。温泉は時間が経ってしまったからか、最初に触った時に比べると少し冷めたように思えた。しかし、決してぬるいわけではないので、足湯を体験した私含めたミコタマメンバー3人は口を揃えて「温かいね」と言ってほころんだ顔を見合わせた。足湯は私たちの仲を深めるものとなった。桶は3人の足をすべて入れるには少々狭く思えたが、複数人で入る足湯にとても意味を感じた。そんな11月の少し肌寒い夜であった。

細井 恵悟（社会学科2年）＝文・写真

▲夜の看板の様子

▲温泉マークが目立つ看板

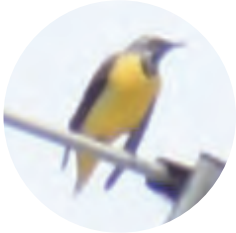
▲櫓の上にいる人形

キャンパス自然観察だより
キャンパスで出会った生き物たち

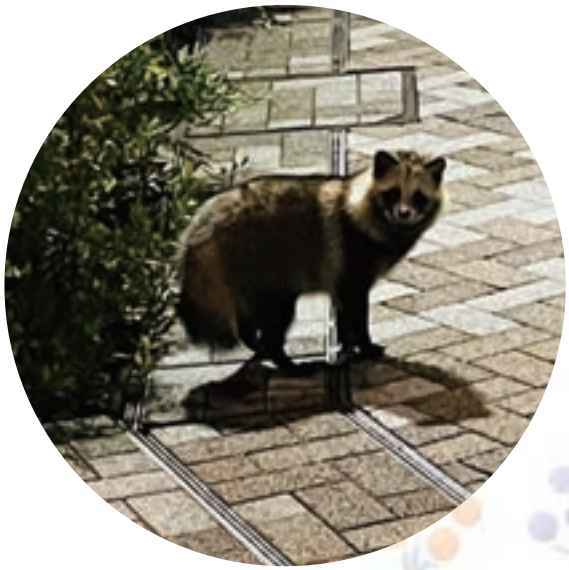
緑豊かな帝京大学八王子キャンパスでは、様々な生き物を見ることができます。
このページでは、夏から秋にかけてキャンパスで出会えた生き物たちを紹介します。

堀越 峰之 (帝京大学総合博物館) ＝文・写真

キセキレイの巣？
(2021 年 6 月 17 日)
キセキレイが盛んに飛んでいた近くに、宿主がいない鳥の巣がありました。もしかしたら、キセキレイの巣だったのかもしれません。



キセキレイ
(2021 年 6 月 17 日)
お腹が黄色く、鮮やかなことが特徴です。キャンパス内を勢いよく飛び回っています。八王子市内では、よく見られる鳥です。



タヌキ (2021 年 10 月 18 日)
生垣の茂みひょっこり顔を出したタヌキ。撮影した方はその可愛らしい姿を見て、思わずカメラのシャッターを切ったそうです。キャンパス内では度々タヌキの姿が目撃されます。(増田一樹氏撮影)

アライグマ
(2021 年 8 月 2 日)
タヌキのようにも見えますが、尻尾の模様を確認するとアライグマのようです。群れで暮らしているのでしょうか。

藍の花（2021 年 9 月 22 日)
布を青系統の色に染めるための染料として使われる藍。キャンパス内にある授業実習用の畑で栽培されています。8 月から 10 月にピンク色の花を咲かせます。

セミの幼虫
(2021 年 9 月 3 日)
夏になるとセミの大合唱に包まれるキャンパス。幼虫は夕方になると土から地上に這い出し、木に登って羽化を始めます。

ヤマトタマムシ
(2021 年 9 月 22 日)
キャンパス内のアスファルトの上を歩いていました。金属のような光沢がとても美しく見入ってしまいます。

ミコタマ 編集部ニュース

2021年9月～2022年1月までのミコタマ編集部の活動をお伝えいたします。

SNSを開設しました

Twitter ユーザー名↓
@Teikyo_Micotama

Instagram ユーザー名↓
teikyo_micotama

Twitter と Instagram を開設しました。刊行のご連絡や本誌設置場所の告知、記事で使用されなかった写真の掲載等をしていきます。SNS を通じて読者の皆様にミコタマをさらに身近なものに、また、私たちの活動をより深く知っていただける機会を広げていきたいと思います。ぜひフォローよろしくお願いいたします！

アンケートへのご回答をお願いします！

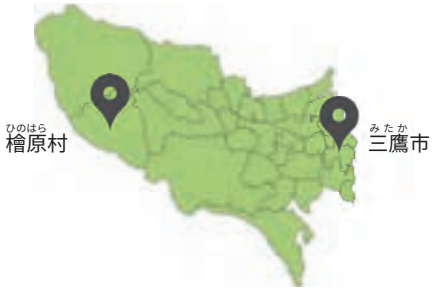
アンケートの URL ↓
https://forms.gle/sQ3kmTX8EHNcP5ow6

本誌の読者の皆様からご意見・ご感想を受け付けています。本誌をより良い記事にするため、また、皆様との繋がりを持ちたいとの思いからアンケートを作成しました。アンケートの回答時間は最短で１分程度です。上記の QR コードまたは URL をご利用の上、ぜひご回答よろしくお願いいたします！

ポップ付きで設置していただきました

紀伊國屋書店 国分寺店様にて、本誌第２号をポップ付きで設置していただきました。２号の特集である「水」にちなんで、カエルが描かれた可愛らしいポップを作成していただきました。紀伊國屋書店様の素敵な計らいに編集部一同大喜びでした。

各地に本誌を設置していただいています



本誌第１号・第２号ともに多摩地域約４０ヶ所の施設にご協力いただき、本誌を設置していただきました。多摩地域内での最も西は檜原村、最も東は三鷹市です。また、その他に大阪（はっち様）・新宿（紀伊國屋書店様）にも設置していただいています。本誌を通して多摩地域の魅力をより多くの方に発見していただけるよう、さらに広めていきたいと考えています。

帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2022 第 3 号

発行
帝京大学総合博物館

編集長
堀越 峰之
坂本 結衣
村松 香音
寺澤 頼来
上原 有響
下坂 愛梨紗
祝 ちとせ

編集・デザイン
山﨑 柚夏〔1〕
小松 結衣〔2-3,48〕
下坂 愛梨紗〔4-5,47〕
小川 果梨〔6-7〕
野口 愛由〔8-10〕
祝 ちとせ〔11-14〕
海老沼 美琴〔15-18〕
三好 龍之介〔19-21〕
寺澤 頼来〔22-23〕
上原 有響〔24-31 〕
村松 香音〔32-33〕
工藤 玲奈〔34-37〕
荒井 涼花〔38-40〕
細井 恵悟〔41-44〕
堀越 峰之〔45〕
坂本 結衣〔46〕

※〔〕は編集担当ページ

ロゴデザイン
寺澤 頼来

特別協力
都留文科大学　地域交流センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート編集部』

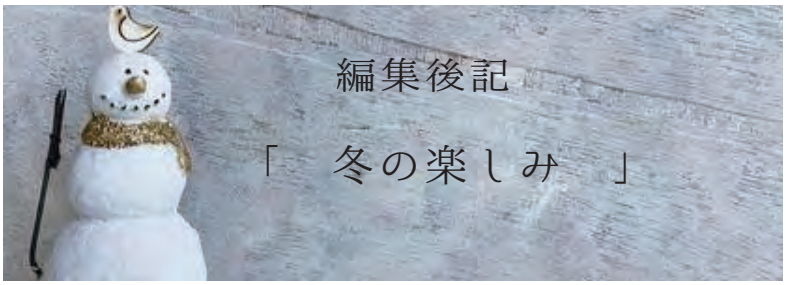
校閲・管理
川北 友美

印刷・製本
㈱ ムレコミュニケーションズ

発行日 : 2022 年 2 月 28 日
発行部数 : 1400 部

発行 / 編集
〒 192-0395
東京都八王子市大塚 359 番地
帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン『ミコタマ』編集部
E-mail:teikyo.u.museum@gmail.com

Ⓒ 2022『ミコタマ』編集部
乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。
編集部までお知らせください。



編集後記
「　冬の楽しみ　」

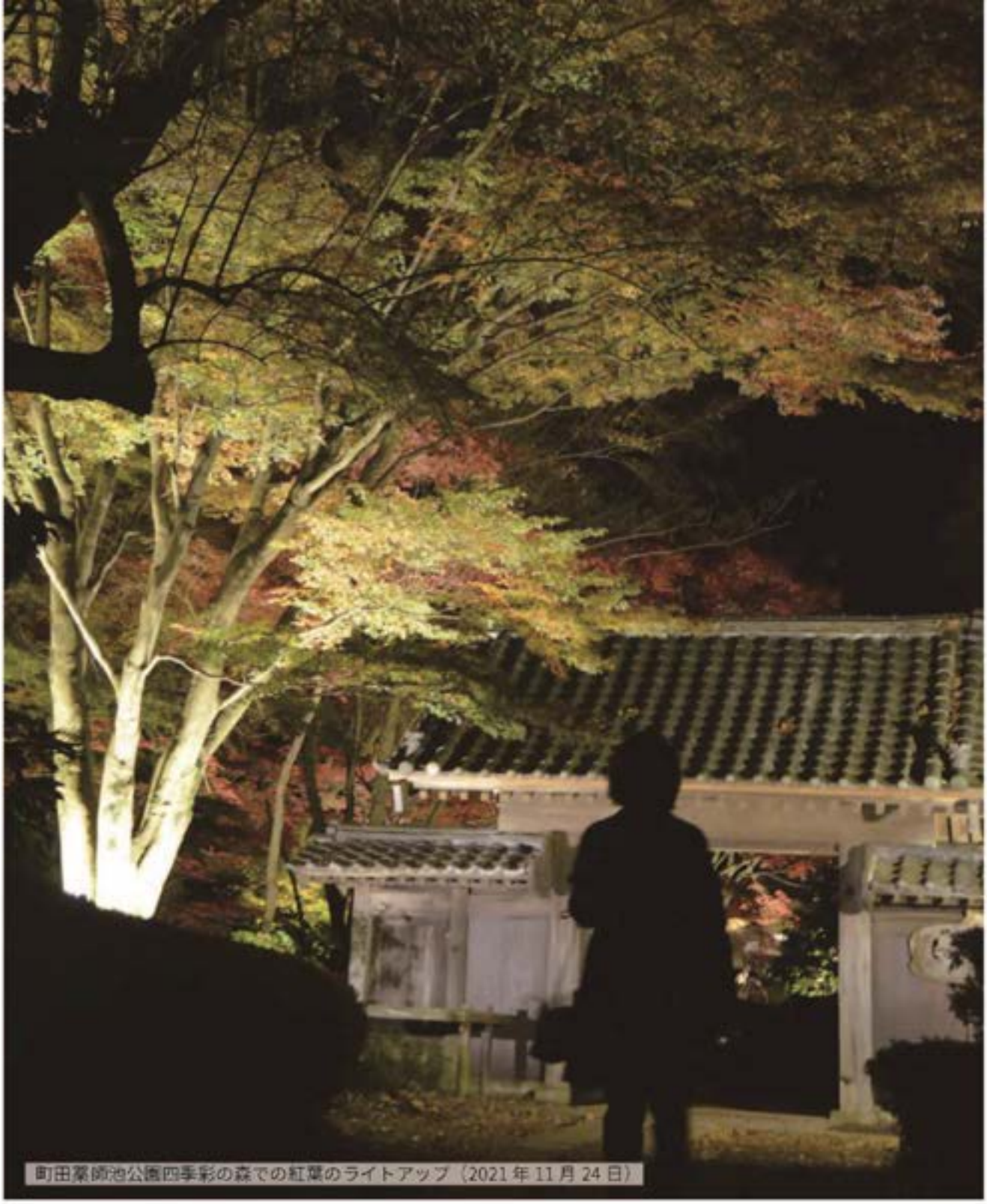
みかんを食べることです！！実家で飼っていたミニチュア・シュナウザーの『ひなの』はみかんとこたつが大好きです。みかんの匂いを嗅ぎつけると走って近づいてきて、ウルウルした目で見つめてきます。今は上京し 1 人暮らしをしているため、ひなのは近くにいませんが、1 人でいてもみかんを食べる時はひなのの足音が聞こえてくる気がします。今年もこたつに入って食べるみかんが楽しみです！（ 小川果梨 ）

日の出前に起きることです。冬は日の出の時間が遅いので、早く起きるとまだ外は暗いですよね。目が覚めてから空が明るくなるまで、窓の外を眺めながらベッドの中で過ごす時間がとても好きです。冬の早朝はまだ薄暗く、空気も冷たくて静かなので、少し寂しい気持ちになります。でもそれも特別な感じがして好きです。寒いと起きるのが億劫なときもありますが、きっとあっという間に春になってしまうので、できるだけたくさん冬の朝を楽しむためにこれからも早起きを頑張ります！（ 小松結衣 ）

雪が降るような本当に寒い時にこたつでゆっくりすることに非常に幸福感を感じます。まだ中学生くらいの時、雪が降っているある日、部活に明け暮れる日々と対照的に休みの日にこたつに入って外に降る雪を眺めながら温かいご飯を食べていたときのことが強く印象に残っています。もちろんこたつだけでも良いのですが、外では雪も相まって景色に色とは別の彩りがあって、本当に幸せな気分でした。またこの頃、あの時よりはもう少し大人に近づいた自分で同じ気分を味わいたいと思っています。（ 下坂愛梨紗 ）

こたつに入ってぬくぬくしながら漫画を読んだり、テレビを見たりする事です。私の家には和室があるのですが、毎年冬になるとこたつを出して飼っている猫達とこたつを奪い合っています。こたつといえば私が小学校低学年の時こたつから出たくなさすぎて 4 時間ぐらい昼寝をしたら 38 度を超える熱を出してしまい、母に怒られた苦い思い出があります。みなさんもこたつに入るときは長時間入りすぎないようにお気をつけください。（ 山﨑柚夏 ）

mico tama
ミコタマ
帝京大学総合博物館　多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2022 第3号
発行日 2022年2月28日（年2回発行）
発行 〒192-0395 東京都八王子市大塚359番地 帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト フリーマガジン『ミコタマ』編集部



町田薬師池公園四季彩の森での紅葉のライトアップ（2021年11月24日）

帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学八王子キャンパス周辺の自然、文化、歴史、現在に関する魅力を、帝京大学総合博物館が調査したことをもとにして広く社会に紹介するプロジェクトです。

「赤駒を　山野に放し　捕りかにて　多摩の横山　徒歩ゆか遣らむ」（万葉集）

放牧してある赤駒を捕まえることができなくて、険しいという「多摩の横山」を（防人に赴任する夫に）歩かせてしまうことになったよ。

この歌は、奈良時代に編まれた「万葉集」の歌の一つです。「防人」として武蔵国を離れて九州に赴任する夫を妻が気遣った歌です。「多摩の横山」と呼ばれる場所は、ちょうど帝京大学八王子キャンパス周辺にあたります。丘陵が、横に長く連なる様子を当時の人々は「多摩の横山」と呼びました。万葉集の頃の「多摩の横山」の面影は、現在は少なくなりつつあります。ですが、しっかりと目を凝らしてみると過去の面影を感じ取ることのできる場所が残っています。そして、それらの場所には過去から現在までの人々の営みが連綿と続いています。このプロジェクトは「多摩の横山」に残された自然や文化、歴史、そして現在の人々の営みに光を当てて紹介するものです。普段は何気なく通り過ぎて気がつかない魅力あふれる「横山」ならぬ「多摩のヨコガオ」を探して記録し、社会に発信していきます。

帝京大学総合博物館 TUM
Teikyo University Museum
TEIKYO